



俳諧御傘八

特別  
~5  
6041  
8





56-4081

袖借し傘

た



八月毎一

梅乃毎一 庭二句

乃梅一 おせり

遊よの八月毎一 三月乃毎

りささささ梅乃毎とり今一ひ

かよ梅乃毎とりささささ

終よのひさささささ白と

さささささささ梅とささ

さ月毎ささささささ

て耳よささささささ

懐終ささささささ

るささささささ月毎二

と乃白下れ句よ梅り

八







みよの若ふち難く極約ふ二の  
まを

橋戸 まを極約し居るなり

橋鯛 橋乃以あるふよりまを  
なり極約よあり

乃況し極貝も同なり

橋麻 まを極約し居るなり  
極約よあり

橋乃鱈 難るなり極約よあり

橋子 人倫し難なりは橋川  
と云結よあり

なり極約よあり

橋川 難しあり

橋井 名あり人名なり

極約よあり

河ち水辺よあり

橋乃る場ち極約よあり

て橋川橋井と極約し

とあり

名あり

乃る橋も







新式乃旨をんそこるひて  
新式乃後乃連漕のさうま  
屋うこ丸うと業名わ乃  
室乃新乃あこりおろと云  
洞乃下よらりくほん

篠乃唐

篠乃唐 篠乃唐は  
篠と切く少く也

居た

さく枕

枕をらり新がらり  
旅りあう候

さくめ

篠よ似らりあるり  
篠乃字よさく

篠と志乃

篠と志乃 篠と志乃  
新式くのことく

漕りハセウまへふここと  
同物と山伏乃お袋衣

さくりけも篠乃字よと云  
さくまへふいと及同神是名  
わり竹とあふまされは漕  
りハセウまへふまへ竹  
さ竹あとあふも竹よあ  
まへ一同云さ志のまへ  
つ篠よ竹のあふまへさ  
答云新式よいらつと云  
るは竹と志のまへと同一  
面と篠と裁まへれさうま  
志のまへよ一はあつ物と云  
さめりあふさくも篠よあ  
一はあつりま志のまへ  
との島のまへひ屋ハセウ  
まへふこ又さくまへふ  
おるれは漕りもさくまへ



馬系より終るす一切の藤佩  
乃名の草系ハ極種ハハハ  
次々成ん物々 常々親木  
乃徳島生類皆重なる物  
多生類ハハハハハハハハ  
死ハ催馬系ハ伴勢中ハ  
那波陣ハ水色ハハハハハ  
秋昔云新式ハ草系ハハハ  
是物々極種ハハハハハハ  
繪より重なる草系ハハハ  
是と云ハ伴勢ハハハハハ  
在ハハハハハハハハハハ  
知ハハハハハハハハハハ  
きハハハハハハハハハハ  
種ハハハハハハハハハハ  
と多ハハハハハハハハハハ

皆ハハハハハハハハハハ  
及種系ハハハハハハハハハ  
と及ハハハハハハハハハハ  
指合ハハハハハハハハハハ  
乃ハハハハハハハハハハハ  
大綱ハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ

保保の衣

非衣類 新式

衣類ハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ



あはれ其湯より可成とも娘と  
云ふり湯のわろきも小の白と  
此のまじく衣のいふもも種た  
実神のまゝに衣敷よふまじく  
その物をもらんそ名取より  
きぬるまじや丸り愚成のよ  
夫保と名る智恵あはらん  
人ち定まらん後生よあらん  
あはれそそあひゆる保保と  
まは保保の山形と云ふまを  
西院とせんまじりあはれま  
神とまじり云ひまはあはれま  
之口傳ふのよまま

さか

さか〜りまよ小松  
小藤のお字付白と  
ま〜ぬや紙不編ま

〜〜 連よ入白灘よま  
ま〜〜 白あま

りの男のまよまよまよまよま  
まよ〜も男鹿るりまよ  
まよ〜も小乃字るれまのまよ  
小のまよまよ

鷺

非水まよ難〜鷺まよ〜  
白鷺とまよ〜まよ〜まよ  
ま〜和音のまよ〜まよ〜まよ  
もまよ〜まよ〜まよ〜まよ  
あま〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ  
まよ〜まよ〜まよ〜まよ

氏の家名活のまゝよまゝとふ  
とかがふとふとふとふとふとふと  
可依る神なり

西乃ひら 西乃ひら 西乃ひら  
西乃ひら 西乃ひら

よ二句可極くおん  
心と新式も少く西の月と  
持て新式も少く西の月と  
酒之乃門なり

坂二 今一君 坂二  
非山歎名別の物なり

付くもくくくくくくくくくくく  
坂山歎くくくくくくくくくくく  
乃むの坂くく山歎く非連懐  
子年の坂も山歎くあつた

連懐小あつたくくくくくくくく  
三乃肉くくまの坂回くま乃  
まよと物く

横乃宮 風乃文 横乃宮  
をわ名家よあつた

咲 くくく 咲  
くくくくくくくくくくくくく

まも本草のむ乃くをきくく  
あつた事くくくくくくくくく  
和と花の咲くくくくくくく  
くくくくの開の字ハ二句くく  
くくくくくくくくくくくく  
字咲乃字用の字ナクくく  
あつたむのひくくくくくく  
戸折文ホ乃用くく面をくく  
咲ひくくくくくくくくく

新式よハ乃々ハ採れおろし一  
りくある人衆詞とととと何  
加と

又苗 さくえ 反く極地るりも田よ  
わんげん

海 うみ 只一名あし一瀬よハ沢二名  
一海よハしととと山沢とと  
よ徳とともとの田と又沢山と  
山沢と田とあしとと地のも  
とと河あしと山沢よもあ田  
おもわもまきとと守沢と乃  
外とと神とも山乃字沢乃字  
とと沢ととと

さい さい 山乃ととおの字より  
付とととわんげん

乃波や大波の字 なみ 乃  
河とら

とと水色をり

とと神名 かみ 乃と波とと  
いしとともおの字よ

二のきととぬかり

とと敷ぬととよ ぬ あつとあけぬ  
あつとあけぬ

付とと田ととよ た 成とと田とと  
とと田とと

乃乃字 のの 月日温新お皆二  
とととととととととととと  
とととととととととととと  
とととととととととととと  
とととととととととととと

甲の河 か 河波の名をり  
あつととととととととと

不非之端 但塩焼汲るわく  
洞を加へるわく 白くくく人梅  
よ成魚く人梅よわわくくも  
名魚よの梅くふく又い流く  
の里の海士るくくあわく云  
白く名魚よわく吹るくく  
若別万由よくくく人梅く  
こくく霞解竹 葉 醉を  
酒 ことくくく又るあくくい内り  
あろくくくくあくくくい内り  
類太崎 二かり 淋よいひあよ  
あゆと替よ 讀あさけとくじ  
醉狂わくくくくくくくく  
よそへ今一ありあく一産りく  
夜酒乃白くわわわわわわ  
くわわわわわわわわわわわ

い内と知るく 皆行と場大し

又月 三三三 明又白梅く先之  
い又素らゆくくくく

月長月 霜月おもわくくく  
もさるあささ月とよいわく  
晨明を又白梅くふくくく  
さ月面の月をもくくく  
かおも天象おもわくく  
明よきくく 幾く道 理ま  
五明月の美名あれくく  
乃月次を月よ二句の介く  
場をくくく

さむら小 園あとの波流 二句梅

かひまもく 又よめめあく  
さむらくく 何く 神のあふ



物に暮る月う酔うさきう物  
るけまといふれぬ酒さうよ  
ぬとさむらよ二句端とあま  
う定く月う暮るの事一入  
一園居家のりふられと東  
分をさふよ一り祢文定より  
付くめ成さぬとさあさあ  
とどおとよ二句端とあま

月のさきうふ

とさきうふ

三句よ目眼ゆまよ耳口よ  
まのつふ春くふささよよ  
さうさうゆり推是よありく  
乃踏當くくさあまとさ  
志く一歳事あく付くさ  
あたりとぬらふ懐秋あ

おも付らう倒あり新式り  
酒情を記すされも古人は味  
世守付来とさ行る但さうと  
云よ視親家乃うりりあわ  
り必月よりさうさあまん  
ふも一ありゆまも年よりこ  
あす鼻のまうとさあも  
は乃さうさあもさあ  
まうとさあも抑子のまうと  
云事もあまの月よんの字  
耳小園の字と若より不編  
次さうさあゆさハ刀よ切澄  
まはくあまあく風よ吹あ  
の歌も可付くはなまふ新ひ  
る原あう丸はくくくとあ  
よ月よさう乃字も年よ







まきのり 只一所のりやとほく

よまきのり一物をまうとつ  
と又一あまう一あつらふと二  
あつらふと一日と終ふも不  
有さく日計も回

明日の種 きのの種をよ

れをまゆふもやまわらふ  
成し

徳 只一徳一の徳衣と一まじ

おの徳乃句よま終つて  
打るま字活ひまうん後  
乃句よいままを活ひまうん  
徳衣と必終よま海もて  
衣もつとも徳の外にわら

徳よ衣終二句まうぬまぬ  
のまよいままを活ひまう  
字よいままを活ひまう  
徳よいままの板とまぬ  
付ら若くまぬまぬ  
まぬたうまぬ  
乃句と板よいままを活ひ  
まぬこのまぬの右篇よま  
まぬよいままを活ひま  
てもまぬまぬ

まぬ の久河に終つ

非衣終つ乃いままを  
小書よあまのまよいま  
越をすまぬまぬ  
まぬを連よ衣終よ二句





木小焼木

新の字と書  
あり二句あり

新よ木ありも二句あり

木よ儿帳

二句ありと云  
解事し儿帳

と云おたわ木の字と云  
うの字子物終ようんま書  
と云又字乃終文をうわ  
解事乃云し終字をん  
何んうく書しわ云をう  
んしう計も木の字乃  
んをた終をわ

木常

木の字二句去  
た云あり

木常路

山敷うーあり  
木常と云うわ

山類と木常路と木常人  
ゆ道ハあ乃國ハわもはく  
まうありあは山類をの所  
あそそれ木常の山路を  
といふ木常山乃中にあり  
なるれ山敷と此准とく  
清んち  
あ也と清んち  
あ

きー

き一寸一朽を久  
野鶴一ひと云

皆まこりらの雛子ハ  
殺入鳴ま成るはらうと云  
入るまこまハハハハ雛子  
のうく前を中の玉未明よ  
ゆさうくどう成鳴る物た  
中よと人なるた物驚りた云



る里とのそりと計りてとも  
雄子の事なる雄三の介  
なうらうらなる色を  
**桐** 枝も物類よらる物なり  
連りしものもてあつらひ  
ぬ物あつて一層は二句あり懐  
案をいへるんをゆきとも  
継よはれりて用ふらるもの  
故乃桐一とて倍桐と物を  
久く又一とて一とて外り  
きりて平きりて屋つ相火  
桐相乃若木の類おもあつ  
寸極物ともるしき極桐  
をうらうらと一とて一とて  
の物と知るべし但桐つなきり  
の産川を離るれとも極物よ

ハ二句まきこ

**小糸**

冬にかき家の候時  
糸なりや霜月下の

**狐**

只一狐とまきつと計も  
この狐は野狐小狐のたか

狐と野子

縮

糸

乃ねとらへて今一とて一とて

川を流るるやあつたとい

なりあつてもけりともけり

くはなうらうらとてあつた

なり

居るよと名は 三句まきこ

君人梅之悪之依り神大

志るうらうら非人梅大志

と天子の御事一と云ふは  
無うも御うき御るりた  
とと御白も云う然と御  
も皆帝は事一御り慈よ  
あつ御一と云と云すい御  
のまををさ御たりも  
人御たり友をとも客をとも  
とと事一ありもも人御  
和漢よ王乃名人御よあり  
すその人御よありぬ王の帝  
王計も天下をともと云  
霸王の名ハ人御なり御  
小も云と云白と云と云  
あつと云御人あつ

菊のむ あつと云菊む音  
と云命を焼物乃

菊む音と云と云と云  
二のこも御くのまを御人  
あつなり

菊 連よ一あまも御よあ二  
あつと云菊もい御

あつあつの菊とらも菊む音  
もいうらあつり人あ名菊の菊池  
菊王丸も此名菊の菊つと云  
刀の菊一文字菊の名か  
菊めい石菊川あは御物あも  
御よもあつ御る御をり  
あつ今一あつ菊のこを御  
林るり

雲の海 あつと云  
あつと云

雲の海 あつと云  
あつと云



と云き乃河津より一燈より二  
ありを不をくくくくく

曲水宴 三月三日おぼろ

祇園会 六月七日なり

乞巧真 七夕をまつる事なり

水野祭 八月廿日なり

さわ原の駒 仲夏の暮に  
秋なり

さぬくらり 冬も衣類なり  
月の小袖を飾る

くくくくく

遊

夕暮 只一灘よりなる事と  
と一ふへ一終ふ事と

夕陽落る事も二句の内なり

夕暮小舟を下は極次 若人目  
映るる夕暮は同一なる事

又夕暮別るれ二句の内なり

とも夕暮とり夕暮と一面を  
二句し又夕暮の海の空の  
空るれも乃字まの空より

不極

夕暮と云ふ めがのるとけく  
いふ事なり

夕暮のありし夕暮を極と  
二句も同一事の内なり

しりくうしりめありといふ  
の終るなり

クア

連ふ二排よいこあるなり

クアとらるなりをわらふ一はく  
おきこ一は四句物に排よいせこ  
と終ふ一は句物に終ありといふ  
乃初よりクアハ連ふもクアの字乃  
裏よおきこも排ふなりとクアと  
ハセ句物なりとクアと面を留めし  
クアとクアとクアとクアとクア  
アと初合連よいといふあり排  
よハ八音をわらひよはく二句  
三句ありなりよはく連ふの字  
クアの字をわらふ寸合一終よ  
終るもはくはくはくも初合  
一はよハありといふなりとクアと

クア

寸尺ぬのなるれとクアの

はちこ乃字よハ三句終るなり  
是等の字よ二句物といふなり  
一但排よハクアハありなり  
風ありといふ一は句物をく  
ありこも耐ありクアの字ハの内  
よわらくクアハありなり  
是もふ三句物に耐ありなり  
物あり物も二句白雨と云ふハ  
夫海森由已は橋山谷なり  
よありといふ終るなり





一人の終の古之に終回り瓢と  
 簞とこたをを瓢瓢少く水  
 とのこ簞小食物をへあう  
 ぬ魚うあんと云はくこま  
 ひさのの物乃屋うよ人の  
 物うた候おしわさ下に云  
 付うちを又るれをを分りて  
 吾等しは魚うらんを神よ  
 けりく終よを所をう只ハ  
 難しぬく魚丸ひさこた  
 ひ名乃内おうらよ行と人  
 心と三まへ一々魚乃宿ハ極  
 物うり居る所をむとてても  
 及こ突の字あれと極こ  
 乃知こ 西園 事こ々の  
 字乃おこ々の字

こハ二句言の字ハ二句  
 分の動詞ハ小も又阿ハ小  
 きうも次骨の字よりハ面を  
 きうぬこ

ゆふうう 及こあぬか  
 神祇こ々阿かこ

夕月言 このさか 乃正  
字神傳の極うこ  
 おうううハ高代傳うら人わ  
 及へうん

鶴乃事 神祇よあ  
神祇よあ  
 鶴乃事こ空笑のあおもよあ  
 里

雲 連よハ 雲を入  
連よハ 雲を入  
 雲田向の物と次詠りハ





古方を建跡小せし事あり  
海に連漣よ万葉の事を  
不肖事ありんや宗祇宗  
長阿ふよ八雲士の事を雑よ  
せし積しとて成赤人の甲子  
乃浦の事を新古今の冬乃  
部よ八雲士とて定家と澄  
の阿万葉の事を不肖事  
と雑言しとて冬よありと  
定しとてわきおき推し人の物  
を不肖事ありとてむらとて  
と人忠とてひいとて海とて  
て幾とて海しとのを世業  
平のよめ家とて伊勢物語  
見えや一口よとてひいとて  
二葉名を死人とてあひと

よめ海しとてむらとて  
殊勝されとて新古今の  
長傷の部よ入ら海し集と  
連歌の事乃建とてあは  
ひ事も長傷の事をたひ  
の部よ入ら積しとてあひ  
ありとていそんやあ終の  
習ひ集しとてあは事と  
水りゆり新古今の部と  
作しとて万葉の事とて  
えとてその事ゆりた  
しとて積しとてあはと  
とてあは事とてあは  
あはとて新古今の部と  
あはとて新古今の部と  
あはとて新古今の部と



てら清ぬまのよさうられ  
ん雪もけも皆まこその  
ぬら雪のひらも雪乃清  
事一も冬よあまは皆ま  
り一雪らとらうららら  
ぬと

雪乃山

二又あり一よ雪と  
あめらと地りら  
山がら雪まらきの影こま  
雪物こまも非山敷二りち  
矢笠の雪山に句解ふらと  
雪二のりもも非山敷  
物よい場まも成らり  
けくまら雪の山とけをえ  
雪雪山とあらへ

雪小

初二のまに霞とめ  
目のまじらるも二句  
かり連よハ七句まに  
ま句場へ一又解らるら  
くともうつの字を結へ  
解ふよあらまら

雪と

らりまらハ大勢無  
成し依句解しま解ら  
まら無しもらう寸解ら  
りもあらけいま林の雪  
とまハ雪のくくもけ  
怪事如雪と物よあるも同  
一事とま解らうき  
年月日時ららひとた  
まら雪らららら  
あらけとま事とまの解ら

夏秋の歌の夏なりくく云々  
との夏ちの語類の句類  
よふ中し夏中間言夏想  
玉輝るく中も類ふにあり  
寸夏の字よみ句き

夏の世

夏のくくあくとま  
河野ふよあくと

夏のく

夏よ二句類ふよ  
あくと

ら小尖

ら張月年れ矢  
おひ類よあくと

他可音類と新武国の折紙  
をききし物の字よわせり  
らと尖よ折紙きく人と  
と事しあとの小書はら張  
月と云よ年の矢と云句の

折紙をききし物よあくと  
わをききし人と事しあくと  
と事しあとの年の矢も二句  
年の矢よあとのらと二句  
かりわをききしと云八月の  
月と年の矢との事しあくと  
謝よはら張月と年の矢も  
面らりとききし物よあくと  
物ありの字よあとのらと  
月のらと連よ二句きし物  
よはききしと夏よ續句今一  
あくとこの物と守

ゆ 非類ふとこととれも  
類ふと

好くあよ 物の字よ末の字  
と二句類ふと

事ハ向ナク書クヨク  
心ハ向キテハ身ノ極ニ  
母ノ極ニ志ムルノ足アリ  
ありては心ハ道ヲ  
心ニ志ムル極ニ志ムル極  
心ニ志ムル向テノ心ニ志ム  
ありては心ハ向テノ心ニ志ム  
心ニ志ムル極ニ志ムル極

ヨクヨクニ志ムル極ニ志ムル極  
唯選トシテノ心ニ志ムル極  
ありては心ハ向テノ心ニ志ム

トシ末トシ末ニ志ムル極ニ志ムル極  
心ニ志ムル極ニ志ムル極

心ニ志ムル極ニ志ムル極  
心ニ志ムル極ニ志ムル極

心ニ志ムル極ニ志ムル極  
心ニ志ムル極ニ志ムル極  
心ニ志ムル極ニ志ムル極



